

追手門学院大学
心理学論集第29号抜刷
2021年3月31日発行

原 著

過去の両親からの受容および現在の家族関係が
青年の心理的適応に及ぼす影響の検討
—— Parental Acceptance-Rejection Theoryによるアプローチ

山 上 翔 平
(追手門学院大学)

Effects of past parental acceptance and current family relationship on
psychological adjustment in adolescents
—— Approach of Parental Acceptance-Rejection Theory

Shohei Yamagami
(*Otemon Gakuin University*)

原 著

過去の両親からの受容および現在の家族関係が 青年の心理的適応に及ぼす影響の検討 —— Parental Acceptance-Rejection Theoryによるアプローチ

山 上 翔 平

(追手門学院大学)

Effects of past parental acceptance and current family relationship on psychological adjustment in adolescents

—— Approach of Parental Acceptance-Rejection Theory

Shohei Yamagami

(Otemon Gakuin University)

本研究では、親子関係が青年の心理的適応に及ぼす影響について、PARTheoryの仮説に基づき検討した。なお、PARTheoryでは過去の両親からの受容が心理的適応を規定すると仮定されているが、本研究ではそれらの関連を現在の両親からの精神的自立が媒介すると仮定した。調査対象者は大学生383名（男性：163名、女性：220名）であった。分析の結果、幼少期の父親と母親の双方からの受容は敵意／攻撃性を抑制すること、および幼少期の父親と母親の双方からの受容は現在のそれぞれの親との信頼関係を媒介してネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観を低めることが示された。

This study was conducted to reveal the effects of participants' parent-child relationship on psychological adjustment. Participants were 383 undergraduates and graduate students (men 163 and women 220). The results of a structural equation modeling showed that acceptance from both their father and mother in childhood directly decreased their Aggression, and acceptance from both their father and mother in childhood mediate current parent-child trust and decreased their Negative Self-Esteem, Negative Self-Adequacy, and Negative Worldview.

key words : PARTheory, parental acceptance, psychological independence, psychological adjustment

序 論

2019年の大学進学率（大学・短大）は58.1%と過去最高を記録した（文科省, 2019）。このように我が国では高学歴化が進んでいる。また、ポスト青年期（宮本, 2004）や成人生成期（Arnett, 2000）という言葉が示すように青年期の長期化も伺える。青

年期は依存（dependence）する子どもから自立（independence）した大人への移行期と理解されているが（溝上, 2010）、上記の現象が示すように心理的に自立できない青年が増加している。また、青年期の親子関係についてもパラサイトシングル（山田, 1999）や一卵性母娘（柏木, 2003）というように親への過度な依存や親子の相互依存の在り方が指摘されている（平石, 2010）。

そのような青年期における親子関係について、落合・佐藤（1996）は関係の変化のプロセスを整理している。具体的には、前期青年期である中学生の時期は、子を手の届く範囲において、子を抱え込み養う関係である「親が子どもを抱え込む親との関係」が多くみられ、高校生の時期を境に徐々に変化し、後期青年期である大学生の時期になると、親から離れたわけではなく、子は子でありながら心理的に親と対等な関係を築く「対等な親子関係」が多くみられるようになる（落合・佐藤，1996）。このように青年期において親子関係は質的に変化するのである。なお、青年期は先述の通り依存（dependence）する子どもから自立（independence）した大人への移行期であり、自立が課題となる時期であるので、本研究は青年期の親子関係の中でも親からの精神的自立に着目することとした。

自立については国内外で多く検討されている。海外では主にautonomyやindependenceといった親からの独立や分離を強調することに注目されてきた一方で（Hoffman, 1984）、日本においては親を含めた他者との関係性が重要視されてきた（山田，2011）。例えば水本・山根（2011）は、青年期における母娘間の精神的自立について、適応的な自立を「親との信頼関係を基盤として親から心理的に分離して親とは異なる自己を築くこと」と定義している。そのため、青年期の自立を検討する際には信頼感といった親子の結びつきについても注目することが求められる。

青年期の適応についてはこれまでも多く研究がなされており、その規定要因の一つに対人関係が挙げられてきた（Carlson, 2006; Li & Warner, 2015; Parker & Benson, 2004; Rhoades & Wood, 2013; Rodriguez, Nichols, Javdani, Emerson, & Donenberg, 2003; 浦, 1997）。青年期の重要な対人関係は親子関係から友人関係のように家庭外の関係に移行すると指摘されているが（浦，1997）、青年期においても親子関係は継続するものであり、それは対人関係の基盤となる関係である（小高，1998）。先行研究でも両親からのサポートが高いほど自尊心が高くアルコールや薬物の乱用と非行を抑制し（Parker & Benson, 2004）、青年の精神的健康を規定することが報告されている（Rodriguez et al., 2003）。また、両親の関与が青年の非行、問題行動、ネガティブ感情を抑制することや（Carlson, 2006）親子の信頼関係が大学適応感を高めるように（山上，2020a）、親子の関わりが青年の適応を規定することが報告されている。一方で、親子間葛藤は自尊心を低下させることや（Li & Warner,

2015）、社会的不適応をもたらすように（Rhoades & Wood, 2013）、親子の対立は青年の適応に悪影響を及ぼすことが示されている。これらの研究が示すように青年期においても適応に対する親子関係の影響は大きいことが伺える。

親子関係に関する研究の一つにRohner（1986）により提唱されたParental Acceptance-Rejection Theory（PARTheory）が挙げられる。PARTheoryでは、子どもおよび成人の認知した両親からの受容は心理的適応と関連があり、それらの関連は文化や人類、性別によらず世界共通であるという仮定に基づき検討されてきた（Khaleque & Rohner, 2002; Rohner & Khaleque, 2010）。そのうえで、世界中で行われた研究において、これらの仮説は支持されている（Ali & Rohner, 2015; Khaleque & Rohner, 2002, 2012; Rohner & Khaleque, 2010）。PARTheoryでは愛着ある他者からの受容—拒絶を一つの連続体として捉えられており、幼少期の両親からの受容—拒絶がのちの心理的不適応に影響を及ぼすと考えられている（Khaleque & Rohner, 2015）。

また、重要な他者からの拒絶によって引き起こされると考えられている心理的不適応はAcceptance-Rejection Syndrome（Rohner, 2004）としてまとめられており、Hostility / Aggression（敵意 / 攻撃性）、Dependency（依存）、Negative Self-Esteem（ネガティブな自尊心）、Negative Self-Adequacy（ネガティブな自己充足）、Emotional Unresponsive（情緒的無反応）、Emotional Instability（情緒的不安定）、Negative Worldview（ネガティブな世界観）の7つの側面に分類されている。それらの心理的適応についてはRohner & Khaleque（2005）により作成されたPersonality Assessment Questionnaire（PAQ）を用いて測定されている。先述の通り、これまでもにおいても心理的適応を扱う研究は数多くなされていたが、それらの研究では自尊心（Li & Warner, 2015）や問題行動（Carlson, 2006; Parker & Benson, 2004）といったように心理的適応の中でも断片的な指標を抽出して検討されてきた。しかし、PARTheoryでは心理的不適応を7つの側面から多面的に捉えているため、PARTheoryの理論に基づき研究を行うことは有効であると考えられる。

PARTheoryでは、成人において、回顧した幼少期における両親からの受容が現在の心理的適応を高めると結論付けられている（Ali & Rohner, 2015; Khaleque & Rohner, 2002, 2012; Rohner & Khaleque, 2010）。しかし、親への過度な依存や親子の相互依存

の在り方が指摘されているように青年期における親子関係が密接になっている現代の潮流を考慮すると、現在の親子関係も心理的適応に影響を及ぼす要因になり得ると考えられる。親子関係は生涯にわたり継続する関係であるが、落合・佐藤（1996）が指摘するように青年期において親子関係の質が変化する。そのため幼少期の親子関係と現在の親子関係を区別して捉えることは意義があると考えられる。Bowlby（1977）は幼少期の親子関係がのちの対人関係に影響を及ぼすことが指摘した。そのため、現在の親子関係は幼少期の親子関係が基盤となって形成されることが考えられる。

青年期の親子関係について本研究では信頼関係と心理的分離に着目するが、感受性や情緒応答性が高いといった受容的な養育態度は親子の愛着を安定させること、安定した愛着を築いた乳幼児は養育者との間に信頼関係を築きやすいことが指摘されている（数井・遠藤, 2005）。また、幼少期に両親と安定した愛着を築くことができていると青年期における両親からの分離を促進することが報告されている（Mattanah et al., 2004）。これらの先行研究の知見から、現在の両親との信頼関係と心理的分離は過去の両親からの受容の影響を受けると考えられる。さらに、両親と信頼関係が築けていることおよび心理的に分離していると心理的に健康であることが報告されている（藤原・伊藤, 2010; 水本・山根, 2011）。

なお、PARTheoryにおいて、両親からの受容と心理的適応の関連に性差が認められないことや（Khaleque & Rohner, 2002; Rohner & Khaleque, 2010）、水本（2018）において、水本・山根（2011）による青年期の心理的自立のプロセスは男性青年や父子関係にも適用可能であることが明らかにされているため、青年の性別を考慮せずに分析を進めることとした。

以上のことから、過去の両親からの受容と心理的適応の関連を現在の両親との信頼関係および心理的分離が媒介すると仮定した。具体的には、幼少期における両親からの受容は現在のそれぞれの親との信頼関係の構築を促進し、両親との信頼関係が心理的適応を規定する（仮説1）、幼少期における両親からの受容は現在のそれぞれの親からの心理的分離を促進し、両親からの心理的分離は心理的適応を規定する（仮説2）と仮定した。これらの仮説にもとづき、構造方程式モデリングによって検証を試みた。

方 法

調査参加者および手続き

関西および北海道の私立大学において大学生を対象に2019年9月から10月にかけて、Googleフォームを用いてウェブ上で調査を行った。参加は強制でないことおよびプライバシーは厳守されることを文面および口頭にて説明した。

また、回答は年齢と性別のみを問い、無記名で行うことで個人情報の保護に努めた。471名のデータを回収し、年齢が30歳以上の回答者、回答していない項目があるものおよび、父親、母親の一方の関係しか回答していない88名を除外した。最終的に383名（男性：163名、女性：220名）が有効回答者となった。平均年齢は20.01歳（SD=1.46）であった。

調査内容

青年の回顧した幼少期の親子関係 成人の回顧した小学生（7-12歳）の時期の両親からの受容—拒絶を測定する尺度であるAdult PARQ short form（Rohner, 2005）は24項目で構成されており、回答は「まったく当てはまらない（1点）」から「まったく（いつも）その通り（4点）」までの4件法で求めた。なお、父子関係と母子関係はそれぞれ区別して回答を求めた。本尺度は、“父（母）親は、私が悪いことをした時にはしかった”などの項目が含まれており、得点が低いほど受容的であったと認知していることを示した。なお、本研究では幼少期の両親からの受容が心理的適応を規定するという仮説の基で分析を行うため、尺度得点に逆転処理を行い、得点が高いほど受容的であったと回顧したことを示すよう得点化を行った。

青年の認知した両親からの精神的自立 現在の両親からの精神的自立を測定する親子関係における精神的自立尺度（水本, 2018）は11項目で構成されており、回答は「全くあてはまらない（1点）」-「よくあてはまる（5点）」の5件法で求めた。なお、父子関係と母子関係はそれぞれ区別して回答を求めた。

本尺度は精神的自立について、“父（母）親は私の考え方を尊重してくれていると感じる”などの項目を含み、親との関係において信頼関係が築かれていることを示す「親との信頼関係」6項目と、“私には、父（母）親とは異なる独立した考えがあると思う”などの項目を含み、親との一体感から分離して自己を築いていることを示す「親からの心理的分離」の

2 因子から測定している。

青年の心理的適応 PARTheoryにおいて成人の心理的適応を測定する尺度であるAdult PAQ short form (Rohner & Khaleque, 2005) を山上 (2020b) によって日本語訳されたものを用いた。なお、山上 (2020b) による日本語版Adult PAQ short formは23項目で構成されており、回答は「まったく当てはまらない (1点)」から「まったく (いつも) その通り (4点)」までの4件法で求めた。

本尺度は“私は、自分が使用と思ったことのほとんどができないと思う”などの項目を含む「ネガティブな自己充足」6項目、“私にとって人生はよいものだ (逆転項目)”などの項目を含む「ネガティブな世界観」3項目、“私は、何か困ったことがあるときに励まされたい”などの項目を含む「依存」5項目、“私は、上手いかわないと心配になる”などの項目を含む「情緒的不安定」3項目、“私は何か、もしくは誰かを叩きたい”などの項目を含む「敵意 / 攻撃性」，“私は、自分をとても良いと思う (逆転項目)”などの項目を含む「ネガティブな自尊心」3項目で構成されていた。

結 果

各尺度の因子構造の検討

仮説モデルを検討するために用いた尺度の因子構造を確認するため、それぞれの尺度に対して主成分分析および探索的因子分析を行った。はじめに、Adult PARQ short formについて主成分分析を行った。その結果、極端に主成分の負荷量が低い項目が認められたため、それらの項目を除外した。そのうえで再度主成分分析を行ったところ、全ての項目において十分な主成分の負荷量が認められたため (.43 — .81)、それらの得点の平均値をもって尺度得点を

算出した。信頼性係数についても十分な値が得られた ($\alpha = .93 - .94$)。

次に親子関係における精神的自立尺度について水本 (2018) に基づき、最尤法バリマックス回転による因子分析を行った。分析の結果、父子関係および母子関係の双方において水本 (2018) と同一の因子構造が得られ、因子負荷量は十分な値が得られた (.44 — .89)。信頼性係数についても十分な値が得られた ($\alpha = .73 - .90$)。そこで、各下位尺度に負荷した項目の得点を合計し、項目数で除して尺度得点を算出した。

最後に日本語版Adult PAQ short formについて、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。分析の結果、山上 (2020b) と同一の因子構造が得られ、因子負荷量は十分な値が得られた (.31 — .87)。信頼性係数についても一部やや低い値であったもののおおむね十分な値が得られた ($\alpha = .60 - .88$)。そこで、各下位尺度に負荷した項目の得点を合計し、項目数で除して尺度得点を算出した。

各変数の相関関係

次に、記述統計量および各下位因子間の相関係数を求めたところ (Table 1)、回顧した幼少期の父親と母親の双方からの受容と現在のそれぞれの親との信頼関係の間に、正の高い相関が認められた ($r = .79 - .81, p < .001$)。一方で、回顧した幼少期の両親からの受容と現在の両親からの心理的分離については、父子関係のみ負の相関が認められた ($r = -.18, p < .01$)。また、幼少期および現在の親子関係と心理的適応については、回顧した幼少期の両親からの受容および現在の両親との信頼関係と敵意 / 攻撃性、ネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観の間に負の相関が認められ ($r = -.26 - -.40, p < .001$)、幼少期において父親と母親の双方

Table 1 各尺度間の相関と記述統計量

	平均 (SD)	幼少期 父親受容	幼少期 母親受容	現在 父親信頼	現在 父親分離	現在 母親信頼	現在 母親分離	敵意 攻撃性	依存	ネガティブな 自尊心	ネガティブな 自己充足	情緒的 不安定	ネガティブな 世界観
幼少期 父親受容	1.86 (0.51)	—											
幼少期 母親受容	1.71 (0.53)	.62 ***	—										
現在 父親信頼	3.59 (0.98)	.79 ***	.51 ***	—									
現在 父親分離	3.87 (0.76)	-.18 ***	-.03	-.26 ***	—								
現在 母親信頼	3.91 (0.95)	.51 ***	.81 ***	.56 ***	-.05	—							
現在 母親分離	3.79 (0.80)	-.04	-.08	-.05	.66 ***	-.10	—						
敵意 / 攻撃性	1.79 (0.60)	-.33 ***	-.40 ***	-.23 ***	-.05	-.26 ***	-.04	—					
依存	2.74 (0.58)	.06	.10	.07	-.07	.13 *	-.02	-.02	—				
ネガティブな自尊心	2.82 (0.74)	-.29 ***	-.27 ***	-.28 ***	.06	-.30 ***	.06	.17 ***	-.19 ***	—			
ネガティブな自己充足	2.60 (0.63)	-.34 ***	-.30 ***	-.34 ***	.04	-.32 ***	.00	.24 ***	-.06	.65 ***	—		
情緒的不安定	3.20 (0.59)	-.11 *	-.06	-.06	.12 *	-.04	.11 *	.19 ***	.25 ***	.28 ***	.43 ***	—	
ネガティブな世界観	2.38 (0.82)	-.33 ***	-.36 ***	-.35 ***	.05	-.38 ***	.01	.26 ***	-.13 ***	.64 ***	.56 ***	.26 ***	—

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

から受容されていると認知しているほど、また現在において父親と母親の双方と信頼関係を築けているほど心理的に適応していることが明らかとなった。

仮説モデルの検討

幼少期の両親からの受容が現在の両親からの精神的自立を媒介して心理的適応に影響を及ぼすという仮説モデルを検討するためAmos Ver24を用いて、構造方程式モデリングによる分析を行った。具体的には、相関係数を基に幼少期の両親からの受容（第1層）から現在の両親からの精神的自立（第2層）および心理的適応（第3層）、現在の両親からの精神的自立（第2層）から心理的適応（第3層）に対してパスを設定し、適合度指標を参考に分析を行った。その結果、最終的には以下に示したモデルが得られた（Figure 1）。適合度指標はおおむね良好な値を示

した（ $\chi^2(20) = 26.27$, $p = .16$, GFI = .99, AGFI = .96, CFI = 1.00, RMSEA = .00）。

分析の結果、幼少期の父親と母親の双方からの受容は現在のそれぞれの親との信頼関係を促進し（父親, $\beta = .79$, $p < .001$; 母親, $\beta = .80$, $p < .001$ ）、心理的分離を阻害すること（父親, $\beta = -.22$, $p < .001$; 母親, $\beta = -.15$, $p < .001$ ）が明らかとなった。また、幼少期の父親と母親の双方からの受容は直接的に敵意/攻撃性を低めること（父親, $\beta = -.14$, $p < .05$; 母親, $\beta = -.32$, $p < .001$ ）、および現在において父親と母親の双方と信頼関係が築けているとネガティブな自尊心（父親, $\beta = -.16$, $p < .01$; 母親, $\beta = -.21$, $p < .001$ ）、ネガティブな自己充足（父親, $\beta = -.24$, $p < .001$; 母親, $\beta = -.20$, $p < .001$ ）、ネガティブな世界観（父親, $\beta = -.19$, $p < .001$; 母親, $\beta = -.28$, $p < .001$ ）を低めることが明らかとなった。

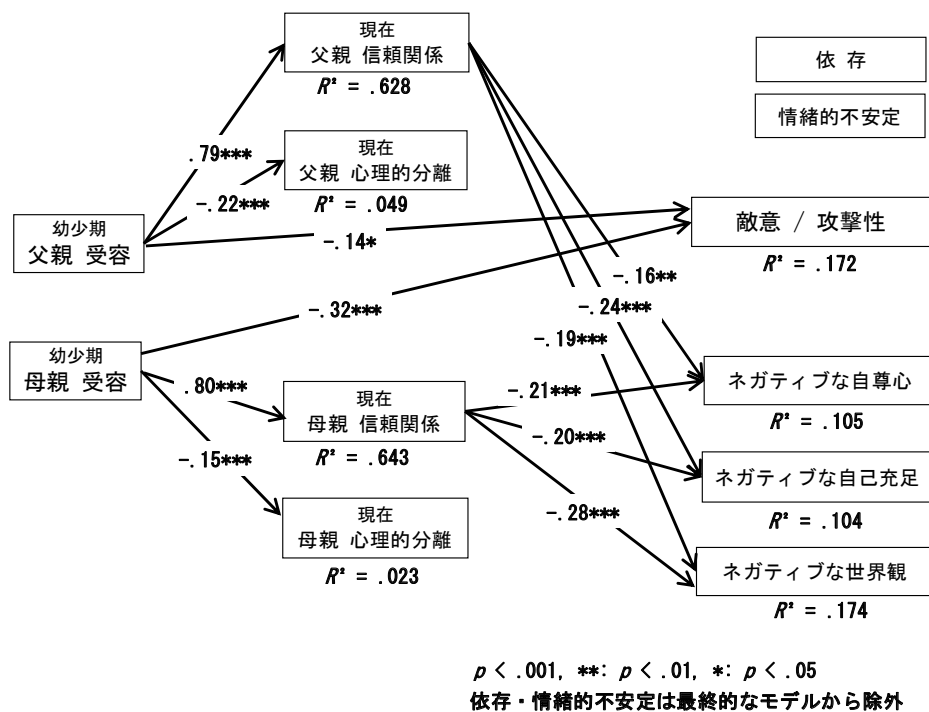


Figure 1 親子関係から心理的適応への影響の仮説モデル

考 察

本研究の目的はRohner（1986）によって提唱されたPARTheoryに沿って親子関係と心理的適応の関連を検討することであった。PARTheoryでは成人において幼少期に両親から受容されていたと認知して

いるほど現在において心理的適応な状態であることが報告されている。しかし、最近の研究ではパラサイトシングル（山田, 1999）や一卵性母娘（柏木, 2003）という言葉が示すように、親への過度な依存や親子の相互依存の在り方が指摘されている。そのため、青年期における親子関係が密接になっており、現在の親子関係も心理的適応に影響を及ぼすと考え

られる。そこで、本研究では幼少期の両親からの受容と心理的適応の関連を現在の親子関係が媒介すると仮定した。

その結果、幼少期および現在の親子関係は現在の心理的適応を規定することが示された。具体的には幼少期の父親と母親の双方からの受容は直接的に敵意 / 攻撃性を抑制すること、および幼少期の父親と母親の双方からの受容は現在のそれぞれの親との信頼関係を高め、その結果ネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観を低めることが明らかとなった。また幼少期の両親からの受容は現在のそれぞれの親からの心理的分離を抑制することが示された。

これらの結果が示す通り、仮説1「幼少期における両親からの受容は現在のそれぞれの親との信頼関係の構築を促進し、両親との信頼関係が心理的適応を規定する」については部分的に支持された。具体的には幼少期の両親からの受容は現在のそれぞれの親との信頼関係を高め、その結果ネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観の適応3つの側面に対して有意な影響が認められた。一方で、現在の両親との信頼関係から敵意 / 攻撃性、依存、情緒的不安定へは有意な影響が認められず、敵意 / 攻撃性に関しては、現在の両親からの精神的自立を媒介させてもなお、幼少期の父親と母親の双方からの受容の有意な影響が残ったことから、心理的適応とひとくちに言っても重要な親子関係の時期が異なることが示唆された。

一方で、仮説2「幼少期における両親からの受容は現在のそれぞれの親からの心理的分離を促進し、両親からの心理的分離は心理的適応を規定する」については支持されなかった。その理由として、幼少期に父親と母親の双方から受容されていると親子関係が密接なものになり、その結果青年期において信頼関係は築きやすくなるものの心理的な分離に困難をきたすようになる可能性が考えられる。この点については今後より慎重な検討が必要である。

また、先の相関分析では幼少期の父親と母親の双方からの受容と敵意 / 攻撃性、ネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観の間に有意な負の相関が認められていたことから、PARTheoryにおける研究の結果と一致するものであった。一方で構造方程式モデリングにおいては、現在の両親からの精神的自立を媒介させた場合に、幼少期の両親からの受容からネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観に

対しての直接のパスが認められなくなった。ここから、これらの適応3つの側面については現在の親子の信頼関係を媒介して間接的な影響を及ぼすことが明らかとなった。しかし、敵意 / 攻撃性に関しては、現在の両親からの精神的自立を媒介させてもなお、幼少期の父親と母親の双方からの受容の有意な影響が残ったことから、幼少期における父親と母親の双方からの受容が重要であることが示された。

本研究では敵意 / 攻撃性に対しては幼少期の両親からの受容から有意な負の影響が認められ、ネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観に対しては現在の両親との信頼関係からの有意な負の影響が認められた。前者である敵意 / 攻撃性は怒りによって生起する感情で、ヒューリスティックな処理によるものと捉えることができる。一方で後者であるネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観とは認知的な努力のような高次の処理を必要とするものと捉えることができる。Stanovich & West (2000) は推論のプロセスを2つのシステムに分類している。ここで規定されるシステムは、自動的、無意識的、情動的でヒューリスティックな心的過程で恐怖、怒り、食欲など生存に不可欠な基本情動や本能的欲求と結びつくシステム1と熟考的、意識的、認知的な心的過程で認知的な努力を必要とする処理であるシステム2に分類されている (Stanovich & West, 2000; 柳澤・阿部, 2016)。これをPARTheoryと対応させると、敵意 / 攻撃性は基本情動である怒りにより生起される感情であるため、システム1の過程と結びつく可能性が考えられる。一方で、自尊心、自己充足、世界観といった概念は認知的な努力を必要として、その解釈によって形成されるものと捉えることができるため、システム2の過程と結びつく可能性が考えられる。ここから、基本情動によって生起されるような側面である敵意 / 攻撃性のようにシステム1に対応する認知過程に対しては幼少期の親子関係が重要であり、自尊心、自己充足、世界観といった熟考的、意識的、認知的な心的過程であるシステム2に対応する認知過程に対しては現在の親子関係が重要である可能性が示唆された。

本研究の意義

本研究の意義について、本研究ではPARTheoryにおいて規定されている心理的適応を個別に検討することで心理的適応に対する親子関係の影響を詳細に検討した。その結果敵意 / 攻撃性のようにシステ

ム1に基づく可能性のある機能に対しては幼少期の親子関係が重要であり、ネガティブな自尊心、ネガティブな自己充足、ネガティブな世界観のようにシステム2に基づく可能性のある機能に対しては現在の親子関係が重要であることを示唆する結果が得られた。これらの結果が示すようにひとくちに適応といっても、それぞれの指標において重要な親子関係の時期が異なることが示された。

また、大学生を対象とした研究では中高生を対象とした研究に比べて親子関係に着目されてこなかった。これは、浦（1997）の研究が示すように大学生になると重要な関係が家族関係から友人関係のように家庭外の関係に移行することが影響していると考えられる。しかし、本研究において幼少期の両親からの受容および現在の両親との信頼関係が大学生の心理的適応を規定することが示されたため、大学生においてもなお両親との関係は重要なものであることが伺える。これは、青年期においても親子関係は対人関係の基盤となる関係であるという小高（1998）の指摘を支持した結果であると考えられる。

本研究における限界点と今後の課題

最後に本研究における限界点と今後の課題について述べておく。本研究では、調査対象者が大学生のみであった。PARTheoryにおける一連の研究では成人期以降の年齢の者も含まれているため、PARTheoryの予測や主張をよりの確に実証するためには、年齢層を拡大して調査を行うことが望ましいと考えられる。

また、本研究では幼少期の親子関係と現在の親子関係を一時点において測定した。そのため、厳密に言えば変数間の因果を問うことが困難である。さらに、過去の親子関係については現在の親子関係を反映したバイアスが生じている可能性が否めないため、今後は縦断的な研究デザインを用いることが望ましいと考えられる。

引用文献

- Ali, S., Khaleque, A., & Rohner, R.P. (2015). Pancultural Gender Differences in the Relation Between Perceived Parental Acceptance and Psychological Adjustment of Children and Adult Offspring: A Meta-Analytic Review of Worldwide Research *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 46, 1059-1080.
- Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties

American Psychologist, 55, 469-480.

Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds *British Journal of Psychology*, 130, 201-210.

Carson, C. (2006). Family structure, father involvement, and adolescent behavioral outcomes *Journal of Marriage and Family*, 68, 137-154.

藤原 あやの・伊藤 裕子 (2010). 青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達——母娘関係が心理的健康に及ぼす影響 カウンセリング研究, 43, 33-42.

平石 賢二 (2010). 青年期の親子関係. 大野 久 (編著). エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房.

Hoffman, J. F. (1984). Psychological separation of late adolescents from their parents *Journal of Counseling Psychology*, 31, 170-178.

柏木 恵子 (2003). 家族心理学——社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会.

数井 みゆき・遠藤 利彦 (2005). アタッチメント——生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.

Khaleque, A., & Rohner, R. P. (2002). Perceived parental acceptance-rejection and psychological adjustment. *Journal of Marriage and Family*, 64, 54-64.

Khaleque, A., & Rohner, R. P. (2012). Pancultural Associations Between Perceived Parental Acceptance and Psychological Adjustment of Children and Adults: A Meta-Analytic Review of Worldwide Research. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 43, 784-800.

Li, Y., & Warner, L. A. (2015). Parent-adolescent conflict, family cohesion, and self-esteem among Hispanic adolescents in immigrant families: A comparative analysis *Family Relations*, 64, 579-591.

Mattanah, J. F., Hancock, G. R., & Brand, B. L. (2004). Parental attachment, separation-individuation, and college student adjustment: A structural equation analysis of mediation effects. *Journal of Counseling Psychology*, 31, 213-225.

宮本 みち子 (2004). ポスト青年期と親子戦略——大人になる意味と形の変容 勁草書房.

溝上 慎一 (2010). 現代青年期の心理学——適応から自己形成の時代へ 有斐閣選書.

水本 深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係——精神的自立と親密性から見た父息子・父娘・母息子・母娘間差 教育心理学研究, 66, 111-126.

水本 深喜・山根 律子 (2011). 青年期から成人期へ

- の移行期における母娘関係——「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討 教育心理学研究, 59, 462-473.
- 文部科学省 (2019). 令和元年度学校基本調査(確定値)の公表について Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_1.pdf (9月23日)
- 落合 良行・佐藤 有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- Parker, J. S. & Benson, M. J. (2004). Parent-adolescent relations and adolescent functioning: Self-esteem, substance abuse, and delinquency *Peer Reviewed Journal*, 39, 519-530.
- Rhoades, G.K. & Wood, L.F. (2013). Family conflict and college-student social adjustment: The mediating role of emotional distress about the family *Couple and Family Psychology*, 3, 156-164.
- Rodriguez, E. M., Nichols, S. R. Javdani, S., Emerson, E., & Donenberg, G. R. (2003). Economic hardship, parent positive communication and mental health in urban adolescents seeking outpatient psychiatric care *Journal of Child and Family Studies*, 24, 617-627
- Rohner, R. P. (1986). The warmth dimension: Foundations of parental acceptance-rejection theory. Beverly Hills, CA: Sage Publications, Inc. (Available as e-book from Rohner Research Publications, Storrs, CT).
- Rohner, R. P. (2004). The parental "acceptance-rejection syndrome": Universal correlates of perceived. *Review of General Psychology*, 5, 382-405.
- Rohner, R. P. (2005). Parental acceptance-rejection / Control questionnaire (PARQ / Control): Test manual. In R. P. Rohner & A. Khaleque (Eds.), *Handbook for the study of parental acceptance and rejection* (4th ed., pp. 137-186). Storrs, CT: Rohner Research Publications.
- Rohner, R. P., & Khaleque, A. (2005). Personality assessment questionnaire (PAQ): Test manual. In R. P. Rohner & A. Khaleque (Eds.), *Handbook for the study of parental acceptance and rejection* (4th ed., pp. 187-226). Storrs, CT: Rohner Research Publications.
- Rohner, R. P., & Khaleque, A. (2010). Testing Central Postulates of Parental Acceptance-Rejection Theory (PARTheory): A Meta-Analysis of Cross-Cultural *Studies Journal of Family Theory & Review*, 2, 73-87.
- Rohner, R. P., & Khaleque, A. (2015). Introduction to interpersonal, acceptance rejection theory, methods evidence and implications *Introduction to PARTheory*, 31, 1-58.
- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2005). 青年期における心理的自立(Ⅲ)——青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響 北海道教育大学紀要, 55, 77-85.
- 浦 光博 (1997). 仕事と家庭のインターフェイスの検討——対人関係の道具性と情緒性のバランスに着目して 平成7年ー平成8年文部省科学研究費補助金(基盤研究(C))・研究成果報告書
- 山田 昌弘 (1999). パラサイトシングルの時代 ちくま新書.
- 山田 裕子 (2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, 23, 1-18.
- 山上 翔平 (2020a). 青年期の親子関係が大学適応感に及ぼす影響の検討 追手門学院大学心理学論集, 28, 1-6.
- 山上 翔平 (2020b). 過去の両親からの受容および現在の家族関係が青年の心理的適応に及ぼす影響の検討——Parental Acceptance-Rejection Theoryによるアプローチ 追手門学院大学心理学研究科修士論文(未公開)
- 柳澤 邦明・阿部 修士 (2016). 社会神経科学. 北村 英哉・内田 由紀子(編). 社会心理学概論 ナカニシヤ出版.

謝 辞

本研究の調査と論文作成および調査にあたりご協力いただきました教員および大学生の皆様に感謝を申し上げます。